

#インタビュー

齋藤健法務大臣

2023年3月17日（金）、齋藤健法務大臣にインタビューを行い、法務省の印象や強み、法務省職員としての心構えなどをお話しいただきました。

インタビュー及び写真撮影は大臣執務室及び赤れんが棟（法務省旧本館）内の法務史料展示室・メッセージギャラリーで実施しました。



1. 齋藤大臣は年頭所感で「私は、希望の仕事を聞かれますと、必ず『困難な仕事』と答えてきました」と述べられるなど、非常にタフな方という印象を持っています。

齋藤大臣は、どのようにそのタフさを培われてこられましたか。

質問の趣旨から離れてしまうかもしれませんが、私は「タフ」だから「困難な仕事」をしてきたのではなく、また意識して「タフさ」を培ってきたのでもありません。

その上で、なぜ、そのように述べるようになったのかというと、私は1983年に通商産業省（現在の経済産業省）に入省しましたが、同期のうち、大学の体育会系運動部でキャプテンを務めたことがあるのは私一人でした。そのため、自分が同期の中で一番大変な部署で働くことになるだろうと考え、自分からそのような部署を希望しました。

通商産業省では2年ごとにポストが変わりましたが、予想外のポストに就いた時の方が、自分が希望したポストに就いた時よりも、視野が広がって成長することができました。

そういった経験もあり、特定のポストではなく、あえて「困難な仕事」と希望するようになりました。私の経験に照らすと、若手のうちは、「自分にはこういう仕事が向いている、向いていない」と決めつけられない方が良いです。まずは与えられた仕事にチャレンジしていくことが大切で、失敗してもやり直すことができるので、仕事を自分で選ばない方が良

いと思います。

2. 齋藤大臣の言葉からは、信念のようなものを感じます。それを支える座右の銘はありますか。

歴史に名を残した人に限らず、真剣に物事に打ち込んでいる方の言葉には胸を打たれるものが多く、好きな言葉は色々あります。例えば、ラグビーの五郎丸選手（五郎丸歩氏）の「未来を変えるためには今を変えるしかない」という言葉や、世界チャンピオンを育てたボクシングのトレーナーの方の「世界を獲るためには人よりほんの少しだけ努力すればいい」といった言葉などが印象深いです。説得力のある発信をしている方の言葉には重みがあります。

その上で、私の座右の銘についてお話ししますと、高杉晋作の辞世の歌です。私は、明治維新の功労者を一人だけ挙げるとすれば、高杉晋作だと考えています。その高杉の辞世の歌に「おもしろきこともなき世をおもしろく すみなすものはこころなりけり」という歌があり、上の句を詠んだところで息も絶え絶えとなって、そばにいた野村望東尼（ぼうとうに）が下の句を付け加えたと言われています。ところが、高杉の生き様を見ると、最期のときに彼がそんな説教じみた句を詠むことはないと考えていまして、高杉のように自分の人生を完全燃焼することで、高杉が詠もうとした下の句を発見することが、私の人生の目標です。

3. 大臣就任後の法務省に対する印象をお聞かせください。

民法、刑法は、日本という国の在り方を決めるものです。これらの基本法を所管する法務省は、単なる政策ではなく、**日本の社会をどのように作っていくかを決める重要な仕事**をしている省庁という印象を持っています。

また、様々な現場を持っており、視察の中で**現場職員の使命感の高さと緊張感**に触れることができました。



4. 法務省の良いところや強みはどのようなものがあるとお感じでしょうか？

現場の第一線で国民生活の基盤を支える多くの職員がいること、また現場を持ちながら政策を作っていけることが、法務省の良さであり強

みだと感じています。あとは、やはり法律のプロフェッショナルである
というところではないかと思います。

5. 国民生活の基盤を支える法務省職員にはどのようなことが求められて おり、どのような志を持つべきとお考えでしょうか。

法務省は、国民一人ひとりの人生に「決定的な」影響を与える施策が多いです。また、先ほども述べましたが、民法や刑法といった基本法を所管しており、これらは日本の社会の在り方を決めるものです。

したがって、法務省職員は、「日本がどういう国、社会でなければなら
ないか」について、しっかりとした考えを持つことが重要です。

また、日本の社会の在り方を決める大事な仕事だからこそ、「日本」に
ついて勉強したり、見識を深めたりする必要があると思います。

明治時代の司法省は、日本に基本的人権や自由の思想をどのように根付
かせるのか、日本の社会をどのように作っていくのかを真剣に考え、実
行する役割を担っていました。現代の法務省職員も、かつての司法省の
こうした伝統を忘れないでいてほしいと思います。

さらに、日本の活力を維持するためには、「共生社会」の実現が必要で
す。「共生社会」とは「活力ある社会」であり、特に外国人材のパワーを
活用することが求められます。外国人技能実習制度、難民認定といった
課題もありますが、「共生社会」の実現に向けて、外国人材を上手に共
生し、双方がハッピーになれるように努力していくことも、法務省の大

切な仕事の一つと考えています。



6. 本日インタビューをさせていただいた私達のように、日頃、齋藤大臣と直接お話しする機会が少ない、係員・係長クラスの若手職員に対し、メールをいただけますでしょうか。

皆さん、**仕事は楽しいですか？**

私自身の経験で言えば、通産省での仕事は大変でしたが、人脈や知識など素晴らしいものを得ることができました。霞が関で働くことは、日本をどうするかというような政策に関わることができるので、成長の機会となります。どうぞ**仕事には全力で取り組んでください。**

そして、先ほどお話しした、**司法省の原点を思い出してください**。また、本を読んだり、法務省以外の人とも交流したりしながら、**広い視野を持って仕事に取り組んでください**。そうすれば、よい法務官僚になることができるのではないのでしょうか。

6. 今後の法務省の情報発信、特に「ほうむSHOW」編集局の今後の活動について、何か一言いただけますでしょうか。

まず、「ほうむSHOW」というネーミングですが………何とかならな
いかな。法務省はおっさんギャグ的なものが多いですよね（笑）。

という冗談はさておき、今後の発信についての提案ですが、特に法務省の
ことをよく知らない方に向けた発信ということであれば、皆さん自
身が前面に出ていくのが良いのではないのでしょうか。「この職員がこん
なことをやっているんです」、「こんな面白い職員がいるんです」と、**一
人ひとりの職員を紹介したり、その職員が担当している仕事を紹介し
たりする**ことを通じて、法務省やその施策を発信していったはどうで
しょうか。BUZZ MAF F（ばずまふ。農林水産省職員自らが、省
公式YouTubeチャンネルでYouTuberとなるなど、担当業務にとらわれ
ず、その人ならではのスキルや個性を活かして、我が国の農林水産物の
良さや農林水産業、農山漁村の魅力を発信するプロジェクト）ほどやら
なくても良いかもしれませんが（笑）。

あと、私は歴史がとても好きなのですが、例えば、大化の改新以降の歴

史の流れにおいて、大宝律令からどのように日本の法律が移り変わってきたのかを伝えてみるといったことも面白いのではないかと思います。

とにかく、みんなに面白いと思ってもらえる情報発信を目指して、自由な発想でやってもらいたい、というのが結論です。